

## 端午の節句

五月五日は国民の休日「こどもの日」で端午の節句とも言われます。

端午の「端」には初めという意味があり、「午」は五と同音であることから、初めの午の日、或いは五日のことを端午とっていました。その為、現在のように五月五日に限らず、毎月五日のことを指していました。この端午の節句が現在のように五月五日の行事として確立したのは中国のある故事から影響を受けたものです。

紀元前三百年頃、中国の「楚」という国に屈原くわげんという政治家がいました。屈原は王の信頼を得て政治家としての手腕を発揮していましたが、その才能を妬む同僚達の陰口によって楚を追放されてしまいました。十五年後の紀元前二七八年、楚の国は秦軍に攻められ滅亡してしまいます。その一報を聞いた屈原は五月五日、石を抱えて川に飛び込み、国に殉じたのです。

屈原の死を悼む人々によって命日の五月五日にはお供え物を川へ投じ屈原の霊に捧げるようになりました。しかしそれを川の龍が盗んでしまうので、米を「おうち」の葉で包み、五色の糸で縛って捧げるようになりました。これがちまきの由来といわれます。おうちの葉は香りがあつて龍が嫌うといわれ、五色の糸は「木火土金水」の五行を表し、邪気を祓うと信じられていました。

現在も中国では旧暦五月五日の屈原の命日にちまきを食べ、屈原の御霊を慰めているそうです。

さて日本における端午の節句ですが、これは前述の中国の故事と日本の伝統とが融合したものであると言えるでしょう。元々日本において五月は「物忌み月」（田植えを間近に控え、心身を清める月）で、邪気を祓う為に菖蒲酒を飲んだり、菖蒲湯に浸かったりしていました。菖蒲の香気は邪気を祓うといわれ、魔除けの薬草とされていたからです。

又、この菖蒲が「尚武」（武事や軍事を重んずる事）と同音であることから、武家では男子のお祝いとして甲冑や刀などを飾り、勇ましく成長するように祈願したのです。これが後に形を変えて武者人形飾りとなったのです。

端午の節句に欠かせない「鯉のぼり」は江戸時代からの風習となります。五月五日は武家における重要な式日であり、大名や旗本は江戸城に出仕し將軍にお祝いを述べたといえます。当時、武家に男子が生まれると幟や馬印を立てる風習がありました。これが庶民にも広まり鯉のぼりが飾られるようになったのです。では何故「鯉」なのでしょうか。

これは中国の伝説に由来します。中国では鯉は出世の象徴とされています。これは黄河上流の「竜門」と呼ばれる激流域をさかのぼった鯉が龍になったことに由来します。（ちなみに「〇〇への登竜門」という言葉の語源はここにあります）このように鯉のぼりも日本の風習と中国の伝説が習合して誕生したものなのです。又、柏餅の柏も古来縁起の良い木であるといわれます。柏の葉は新芽が出てから古い葉が散ることから、「跡目が切れない」といわれ跡継ぎの象徴とされています。

近年、都市部における家屋の集中化等の影響を受け、鯉のぼりを目にする機会が減ってきました。五月人形を飾ったり、菖蒲湯に浸かる家庭も少なくなっていると言います。これらの習慣は単に「端午の節句」を象徴するだけでなく、私達日本人の季節感を身近に感じさせてくれるものです。子供の無事成長を祈る「端午の節句」を後世に伝えていきたいものです。